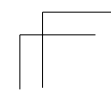
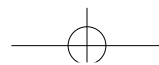
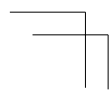
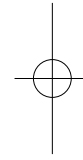
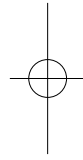
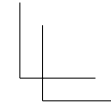
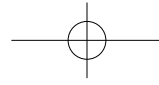
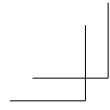
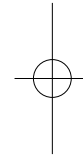
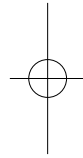


六月の満月

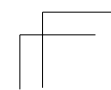
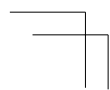




プロローグ	5
第一章 出所	8
第二章 出逢い	67
第三章 変化	124
第四章 崩壊	173
最終章 満月	248
エピローグ	307



307	248	173	124	67	8	5
-----	-----	-----	-----	----	---	---



プロローグ

「ワカケホンセイインコって、知ってる？」

それは、山井章吾が傷だらけの彼女の心を救うために、いまの自分にでも言えることはあるのではないかと、必死に紡いだ言葉だった。

薄い唇に笑みを浮かべた彼女は、突然の問いに驚くように、

「え、なにそれ？ 知らない」

と切れ長な目を輝かせ、答えた。

彼女の名は、巴実日子。

東京の荻窪にある、ちいさな弁当屋で働く女性だった。

「ワカケ……ようはインコってこと？」

「そうそう。緑色した鳥の。ただな——」

こんな他愛もない会話から、幸せなんてもんは生まれるんだな——たった数か月間の実日子

との日々を、章吾は自宅アパートにある小窓を見つめながら、思い出した。

ちいさな窓の外に見える夜空には、月が浮かんでいる。

月を見ると癒されるときもあれば、苛立つこともあって、「なんでおまえはそんなに遠くにいるのに、輝いてるんだ」と時々空を見上げながら思う。

いつも頭上について、見えるときもあれば見えないときもある。欠けているときもあれば、真ん丸のときもある。姿を現したり、消したり、まるでそれは人が感じる幸せなんものに似ていた。

手にしたつもりの幸せは、砂のように、気づけば指の間から、時には掌てのひらさえ通り抜けて、いつの間にか消え失せていく。

——幸せだった。

確かに、幸せを感じた数か月だった。

刑期を終え、十二年ぶりに絶壁のような高い塀のなかから外へ出て、働きはじめた浅井あさい鉄工所。

あたたかい場所だった。

家族とは、こういうものなのかもな——そんな空想さえ味わわせてもらえた。そして、神は実日子と出会わせてくれた。

だが、神なんてものは、そうは甘くない。

あいつが来て——なにかが変わった。

章吾さん——と透き通るような声で呼ぶ、少年とも青年ともつかぬ彼の声が聞こえる。

「おう」

と答えてやりたさ。

すこし生意気で、でも可愛いところもあって、しかし時々、言い知れぬ陰を感じさせる声。でもあいつが来てから、猫が死に、鳥が死ぬようになった。

実日子だけは、守らなければいけないと思った。

第一章 出所

二〇二四年、十一月。

午前八時三十分。

埼玉県、川越市。

門の後ろから、走ってくる音が聞こえた。

「すまん。待ってくれ」

息を切らしてやって来たのは、川越少年刑務所刑務官の相川卓司^{あいかわたくし}だった。五十代の相川とは親子ほど歳が離れているであろう若き刑務官の岸田^{きした}が、相川を見て頭を下げる。

広大な敷地にそびえる、川越少年刑務所正門。

おおきな背丈で、片手に古びたちいさなポストンバッグを持ち、章吾は立っていた。その横に、唇をへの字に曲げた相川が辿り着く。

「さや、間に合った」

必死に呼吸を整えながら、相川は苦笑いを浮かべた。

「すみません。わざわざ」

「なにが」

「——自分なんかのために」

章吾は力なく開いた目で相川を見つめ、いちど礼をした。

「なに言ってるんだ。えー……鞆は持ってるな」

「は？」

相川は忙しなく章吾の全身を確認する。

「あとは、洋服のサイズは大丈夫そうだな」

「は？」

「えー、靴も履いている」

そこまで確認すると、相川はようやく皺^{しわ}の刻まれた顔を緩ませ、ほっと一息ついた。隣にいる岸田が、思わず笑った。

「相川さん、当たり前じゃないですか。そりゃ靴は履いてますよ」

相川は岸田を睨^{にら}むように見て、唇を尖らせる。

「おまえな、そんなのわからんじゃないか。十二年ぶりに外の世界に戻るんだぞ？ うっかり

刑務所のサンダルのまま出てるかもしれないじゃないか」

「備品はすべて返却することくらいわかってるでしょ。六十五番だって赤ん坊じゃないんです

から。なあ？」

「は？」

章吾は身長一八五センチのおおきな背丈に似合わぬ、照れたような微笑を浮かべる。

だが、岸田が口にした言葉が風に乗って躰をまわった。

——六十五番。

章吾が刑務所で服役しているあいだ、付けられていた称呼番号だ。称呼番号とはいわば、罪を犯した者が刑務所に収監されているあいだの名前だった。これがあることで身元確認が確実なものとなり、一方で外部からは身元が特定されにくくなる。また、受刑者同士の過度な人間関係の形成を防ぐという目的もあり、服役中はみな番号を付与されるのだ。

六十五番。そう呼ばれて、嫌な気はしなかった。罪は消えるものではない。自分は罪人だと自覚させてくれるし、単純に、名前よりよほど呼ばれ慣れている。

ただ見張りもない塀の外側で、うつすらと吹く風を浴びながら呼ばれたことに、言いようのない違和感を覚えた。その時初めて章吾は、「外へ出たのだな」と自覚した。

「山井」

章吾の内面を悟ったように、相川は名で呼んだ。そして肉付きの良い頬を引き締めると、まっすぐに彼の目を見た。

「ご苦労様だったね」

「——ええ」

それ以上言葉がつながらなかった。

章吾は、十二年の刑を満期でつとめあげた。罪名は、殺人罪と窃盗罪。二〇一二年の夏、ひとりの男を刺殺した。それ以来、十二年ぶりに塀の外に出たのだった。

周りに目をやる。

午前八時半過ぎ。初めてまともに見える正門の外は、一軒家が軒を連ねる普通の町だった。学校へ通う若者、勤め人がちらほらと目の前を歩いている。そのままゆっくりと首を回し、総敷地面積十七万平方メートルを囲う灰色の壁を見つめた。

「どうした？」

相川刑務官がしずかに問う。

「いや——案外、こんなものだったのかと」

「ああ、高さか」

「そんなに思うほど、高くなかったんだなと思って」

高さ四メートルの壁。受刑者を逃がさぬための灰色の塀は、外から見ると印象が違った。十二年の間、章吾を外の世界と遮断していたこの壁は、服役中ほどの角度から見ても、決してまともな世界へは戻さぬと告げる無機質な城の象徴だった。だが一步正門を出てみると、四メートルというのもそれほどの高さには感じられず、不思議な感覚にとらわれた。無理やりにも外の世界に戻りたいのであれば、運と覚悟と微かな知恵さえあれば登れたのかもしれない。そんな気持ちなど、欠片もなかったが。

章吾は思わず、自嘲的な笑みを浮かべた。

「なんだ、山井？」

「刑務官に呼ばれて、荷物を持って刑務所の正門に行くとき、そこが天国につづく道みたいに見えるんです。でも天国は、案外普通なんだなと」

「そうだぞ。普通がいちばんなんだ」

相川は章吾の腰に手をやり、ゆっくりとその場を離れさせた。

「迎えば、誰も来ないか」

相川が呟く。

「当たり前です。仲の良かった友人もいませんから」

「……うん」

相川は一拍間を置き、うなずいた。

「取りあえず、明日だよな？」

「はっ」

章吾には身元保証人が誰もいなかった。中学二年生から児童養護施設で育ち、母親がいまどうしているのかさえ知らない。そんな状況の受刑者は多いが、相川刑務官はなにかにつけて章吾を気にかけてくれた。刑に服し娑婆しやばに出るまで残り二年を切った時だっただろうか。出所後の生活を問われ、なにも答えられなかった章吾に、「就労支援制度を使ったらどうだ？」と語ってくれた。

「就労支援制度」というのは、二〇〇六年に厚生労働省と法務省が立ち上げた制度で、再犯防止にむけた総合対策を目的としている。

理由は単純で、刑務所を出た元受刑者の五割近くが再び罪を犯し刑務所へ戻ってくる——そのようなデータが問題視されたからであった。「再び罪を犯させない」というのは勿論のこと、刑務所自体の問題もあった。仮釈放者が年々減少し、刑務所の住人自体が溢れかえっているのだ。だから章吾は人を殺した時、二十歳という成人であったが、川越少年刑務所へ送られた。成人刑務所が受刑者で溢れかえるいま、少年刑務所のなかに成人がいることは、驚くことではな。

仮釈放の申請に「帰住先の確保」という要件があるのも問題だ。重犯罪を犯す者に、まともな生活を送ってきた人間は少ない。身分を証明する物すら持たず、住居を得るということは簡単ではない。

そこで国はこの制度を作った。再犯を防ぐためには「出所後の就労先の確保、住居の確保」がなにより必要だと踏んだのだ。この就労支援制度は協力してくれる事業主に対して雇用助成金、最長一年間の就労奨励金を約束し、現在は徐々にだが活用してくれる雇用主も増えつつあった。章吾のように満期で出所する服役囚は、仮釈放者と違い帰住先が決まっていなくても外へ出されてしまう。就職先の確保は、帰住先の確保にもつながるため、ありがたい制度だった。章吾は相川刑務官の勧めによりこの制度を使い、杉並区荻窪にあるという工場の主を紹介された。刑務所にいるあいだに何度かの面接を重ね、その工場主が身元保証人を引き受けてくれ、

出所後に働いてよいという返事をもたらっていたのだ。

明日は、その浅井という工場主に挨拶をしに行く日だった。

「きちんと、挨拶をしてな。まあ、山井なら大丈夫だとは思うが」

「はい。ほんとうになにからなにまで……洋服まで、手配してもらって」

身元保証人もおらず、面会に来る者もない章吾は、当然出所後の衣服など持ち合わせていない。そのような受刑者に対して刑務所は無償で古着のジャージをくれるが、相川は「きちんとした格好をしたほうがいい」と、章吾が受刑しているあいだに得た報奨金を使い、歳が近いという自らの息子に頼んで出所後の洋服を用意してくれた。

章吾が受刑服以外の服を着るのは、十二年ぶりだ。

「嫌な刑務官もいたと思うが、すまなかつたな」

相川は頬を緩ませ、言った。

「おまえは社会に帰らなきゃいかん。川越へ来る成人受刑者は、複数回罪を繰り返した人間ばかりだ。だがおまえは違う……ひとりの人間を殺めてしまったが、事情も聞いたしな。わたしはこんなことを言ってはなんだが……山井は充分、罪を償ったと思ってる」

章吾は裁判ですら語らなかつた罪の理由を、相川にだけ、数年前に話していた。

その事情を聞いたというのもあるのか、彼は自分を必死に社会復帰させようとしてくれた。

「綺麗ごと聞こえるかもしれないが、刑務所なんかに戻ってきてほしくないんだよ。だから山井、もう戻ってくるな。さっきの岸田は申し訳なかつたが、もう二度と、“六十五番”なん

て、称呼番号で呼ばれるな」

「は？」

章吾は相川の目を見て、しつかりとうなずいた。

「今日、寝るところはどうするんだ？」

「どこか探します。報奨金がありますから」

「くれぐれも繁華街には近づくな。なにに巻き込まれるかわからん。普段は物静かなおまえだが、実は血の気が多いことはわかっている。決して繁華街には近づかない。わかっただろ？」

「わかっています」

その時、ひらひらとコンクリートの地面に橙色の破片が落ちてきた。

ひとひらの、花びら。

「金木犀」

章吾は呟く。

「ああ、金木犀だ。山井が塀のなかにいるあいだ、この地球も温暖化ってやつが益々進んじまってるな。九月に秋の訪れを告げる金木犀も、ずいぶん咲くのが遅くなった。一週間しか咲けないうつていうのにな、時季までずれて、不憫なもんだ」

相川は金木犀の花びらを拾い上げると、掌に載せて笑った。

すると彼はしばし黙り、胸の前で十字を切った。相川はキリスト教を信仰している。章吾もそれに倣うように、十字を切る。

章吾は相川の目を見つめた。

「では」

「うん」

相川刑務官は、これが今生の別れになるように、と念じるようなつよい目で、章吾にむかって顎を下げ、門のなかへ消えていった。

——ひとりになった。

ふと、おれはいま何歳になったんだ、と思った。

章吾は、三十二歳になっていた。

*

刑務所で教わった道を歩くと、二十分後、西武線の南大塚駅という場所へ辿り着いた。駅前には十二年ぶりの外の世界の感動など覚えさせてくれない、田舎特有のうらぶれた雰囲気だった。人通りも少なく、廃業してシャッターがしまったままの店舗に交じり、ぼつぼつと飲食店やドラッグストアがある。

ふと見るとコンビニエンスストアがあり、思わず脳内にシュークリームやエクレアなどの甘味が浮かんだ。横を見るとポスターが貼られている。

容疑者の顔写真真入りの「警察庁 指定重要指名手配」のポスターや、犯罪防止を啓発するものだった。

見ると、啓発のポスターは「詐欺」と書かれたものが多い。自分が外の世界にいた時と、おきく違っていた。時代が変わったことを、章吾は一枚のポスターから感じた。

もう一枚は法務省矯正局が作成したものだ。川越少年刑務所が近いからか、そこには事件に巻き込まれた被害者、その家族へむけた文章が書かれている。

——伝えたいこと 伝えるべきこと 被害にあわれた方の「伝える」制度です

その一文の下に、「被害者の方々の要望があれば、担当者がその気持ち、要望などを加害者である受刑者に伝え、被害の実情などを直視させ、反省と悔悟の情を深める指導を行う」といった主旨のことが書かれていた。

——反省と悔悟。

二十歳のときに殺したあの男は、五十歳を過ぎていた。

ろくでもない生き方をしてきたのだろう。殺されたにもかかわらず、裁判の際に彼を擁護するような証人は誰ひとり現れず、粛々と終わった。章吾の情状酌量を訴える証人もいない。冷えてしずかな裁判だった。

やはり、早くこの土地から離れたほうがいいだろう。

甘味への誘惑を断ち切り、章吾は改札口へとむかった。

相川が用意してくれた灰色のチェスターコートポケットから古びた財布を出し、路線図を見上げて新宿駅までの切符を買う。

横目でちらと改札口を見て、「これか」と心のなかで呟いた。

改札を通る人が、それぞれに手に持ったスマートフォンを機械にかざし、すり抜けていく。出所前に講習を受けていたし、事件を起こした時には周りでもスマホを持つ者が増えていたので、触ったこともある。刑務所の中かのテレビでも観ていたので、知ってもいた。だが初めてそれを使ってホームへと入っていく人間を間近で見ると、やはり多少の違和感があった。いまは自分が収監される前とは違い、細長い携帯電話はほぼ姿を消し、スマホが主流だと聞いていた。それを使えば電車に乗れるだけではなく、買物もできて、銀行と連携もできるそうだった。時間が進めばすべての物はちいさくなると勝手に想像していたが、携帯電話は随分とおおきくなつたな、と章吾は思った。

だが、目にするものすべてに大した驚きはなかった。

あたりまえだ。戦前の昭和生まれでもない。

平成四年、一九九二年に東京で生まれた。

そこまで変化してねえな——正直、それくらいの印象だった。

とりあえず切符を改札に通し、電車に乗る。

十二年ぶりに外へ出たというのに、やることは二つしかなかった。

*

新宿駅へ着き西口を出て、目的の場所へむかう。三十一階建ての高層ビル「新宿エルタワー

」。近代的な高層ビルには、誰もが知る大手企業や金融機関がテナントとして入り、地下には飲食店が軒を連ねている。高層階のビルが多い新宿でも、一際目立つオフィスビルだ。

ロビーへ足を踏み入れると、暖房の暖かな空気が章吾の身を包んだ。

落ち着いた空間のなかを、ビジネススマンたちが歩いている。章吾は一瞬、自分の身形に視線をやった。灰色のチェスターコート、なかは同色のセーター、ベージュのチノパンツ——彼らのようにスーツは着ていないが、この場所に不似合いな格好ではないだろう。洋服を用意してくれた相川に、章吾は心のなかで感謝した。

目的の人たちは、ロビーにいた。

闊歩するビジネススマンたちの目に触れまいとするかの如く、しずかに、おおきな電動掃除機

や電動モップで床を磨く、三、四人の面々。

緑色の作業着に身を包む、掃除会社の人間たちだ。

章吾はそのうちのひとり、床を磨く初老の男性に近づいた。

「……あの」

「は？」

七十代くらいだろうか、男性がすこし驚いた様子で、章吾を見て答えた。

「……突然、すいません。ここに、笠原裕子さんはいらっしやいませんか？」

「笠原さん？」

章吾は彼が着る、緑色の作業着を見て言った。

「その……あなたが働いている掃除会社で、十年ほど前に働いていたと思うんですが」
男は章吾の顔を、じっと見ている。

「……二〇一二年に、このビルで掃除をしているのを見て」

「十年以上前ですか……わたしは、まだ働いて二年目なもので。ちょっと待っててくださいね」

男は律義に、別の場所で掃除機をかける男性のもとへ行き、説明してくれているようだった。やがて話を聞いた別の男性が、こちらにやって来る。

「笠原さんですか？」

やはり初老の男性が、作業着姿で章吾に尋ねた。

「ええ」

「あの……失礼ですが、どのような関係で」

「——息子……です」

章吾がちいさく答えると、男性はうなずいた。

「笠原さんはね、確か七、八年くらい前に辞めてますよ」

「そうですか。あの……辞めて、どこへ行ったかなんて、ご存じないですか」

「わからないな……うちら、そんなにべらべら喋らんしね。出入りも多いし、笠原さんもどちらかというと大人しい人だったから……聞いてないな」

章吾はおおきな躰で、視線を床に落とした。

「一応、会社に訊いてみましょうか？」

「いえ、結構です。お仕事中、すみませんでした」

「役に立てんで」

男性は頭を下げ、戻っていった。

笠原裕子——章吾の母親だった。

彼女を最後に見たのは、この、新宿エルタワーのロビーだった。

二〇一二年、六月二十五日、昼。

いまの彼らとおなじように、すたすたと歩くビジネスマンたちの隙間で、誰からの視線も浴びることなく、気配を消すように必死に床を磨いていた母親。

章吾が小学六年生の時に、ろくでもない夫に煙草を買ってこいと言われ、そのまま戻らなかった。殴られ、蹴られ、ぼさぼさの髪でアパートから出ていった姿を、章吾はいまでも覚えてる。

ドアノブに手をかけた時、一瞬だけ振りむいて、自分を見た時の悲しそうな顔も。母親の顔が思い浮かんだ。

生きていけば、六十過ぎになっただろう。彼女の誕生日も、もう覚えていない。覚えてるのは、

「……章ちゃん、お父さんの煙草買ってくるね」
玄関で、なにか嫌な予感がして彼女を見た自分に、そう言ったときの顔だ。

母親は必死に笑顔を作っているように見え、
「帰ってくるよね」

と思わず口から出そうになった。

が、彼女が玄関の扉を開けて家に入ってくることは二度となかった。当たり前だ。あんな暴力亭主のもとからは、誰だって逃げたい。働かず酒ばかり呑んでいる亭主に代わり、彼女は朝も昼も夜も働いていた。自分のことも、愛していたとは思う。でも母親もまだ若かったし、人生をやり直したいと思ったのだろう。昼間働いていたスーパールの同僚に言い寄られ、彼女は靴すら持たず消えてしまった。その二年後には父親は肝臓をやられて死に、章吾は児童養護施設で生きることになった。母親を恨む気持ちは、ひとつもない。

それから六年後——章吾はここで、背を丸めて床を磨く彼女を見たのだ。

遠くから見る母親は、幸せとはかけ離れた生き方をしているとすぐにわかった。まだ五十代であるというのに、その顔は疲れ果てていた。

八年ぶりに母親を見る自分の横に、野本慶介は立っていた。

「……まったく。ろくな女じゃないんだよ。ほんとうに、手がかかる奴だなあ」

呟く声が聞こえて横を見ると、野本は口を半開きにして、じっと母親を見つめていた。

その日の夜——章吾は野本慶介を殺した。

ビルを出る。

なにをやってるんだ。そう思った。

いまさら母親を捜して、なにになる。

昼時に近づいた街は、人々で賑わっている。外国人観光客、カップル、サラリーマンらしき人間。だが見慣れた人間たちの姿を見かけない。やくざ者だ。昼ということを差し引いても、彼らの姿は見たらなかった。

——ずいぶん綺麗になったもんだな。

再開発された街を見て、どこか実体のない、色気のない未来都市みてえだな、と章吾は感じた。

そして道の端を歩きながら、ようやく目にした公衆電話の受話器を取った。古びた財布のなかから、一枚のメモを取る。

「飯島樹 090-25……」中学から高校時代、街で出会った遊び仲間のひとりだった。事件を起こした二十歳のときには交流が途絶えていたが、どこで知ったのか、章吾が収監された五年後に川越少年刑務所に手紙をくれたのだ。人と深い付き合いをしない自分に、唯一届いた友人からの連絡だった。

そこには章吾が殺人事件を起こしたことを知った驚きと、いまは新宿で人材派遣会社の社長をしていること、そして「出所したら連絡でもくれよ」と電話番号がつづられていた。

公衆電話に小銭を入れてダイヤルを押すと、樹の声が聞こえた。
「もしもし？」

通知が公衆電話と出ているからか、訝しげな声だ。

「おれだ。章吾」

「……おう！ 章吾か！」

「ああ」

「出てきたのか」

「まあな」

「しまどこにいる」

「新宿だ」

「じゃあ、うちの会社に顔出せよ。場所は……」

新宿三丁目の交差点を大久保方面へ曲がったビルに、樹の会社はあるという。

章吾はポストンバッグを片手に、むかった。

*

「おうおうおう、章吾！ 座れよ」

飲食店がひしめくビルの三階に、「(株)フィードプロモーション」という樹の会社はあった。

十人ほどの男女が机に座り、それぞれがパソコンと向かい合っている。机上には数えきれないほどのスマホが並んでいた。

章吾は、ただひとり独立したテーブルに座る樹の前に置かれた椅子に、腰を下ろす。海外の

高級ブランドのロゴが入った黒いセーターに身を包んだ樹が、言った。

「すげえ久しぶりだな。十七歳以来か？」

「そうかもな」

章吾は答える。

「おまえが美容師になるって言って、おれらと遊ばなくなった頃だから……そうだよ、十七だな。懐かしいな……若かったな、おれたちも」

「そうだな」

樹は頭のサイドを思い切り刈り上げ、頭頂部の髪の毛を短く残したツーブロック姿で、ずっと笑みを浮かべている。

「流行ってるのか、その髪型」

「え？」

「新宿歩いてたら、悪ぶってる奴が、だいたいその髪型だったからよ」

章吾が言うと、デスクにいる何人かの男たちが章吾を睨んだ。彼らも樹のコピーロボットのように、カジュアルな黒ずくめの服に身を包み、おなじ髪型をしていた。

樹が笑顔のまま社員たちを一瞥すると、彼らはまたパソコンやスマホと向き合う。

「そう、流行ってんだよ。え？ 駄目か？ 格好悪いか？」

「いいんじゃないか。おれはもう、流行りとかわかんねえし」

樹はほっとした表情を見せ、小声で囁いた。

「……何年喰らってたんだ？」
「……十二年」

「……くわ、すげえな」

と、「うす」と社員らしき男が樹に頭を下げて、章吾の前にホットコーヒーを置いた。

章吾はすこし考え、樹に言った。

「悪い。砂糖って貰えるか」

「おう、砂糖持ってる」

「はら」

男は踵を返し、スティックシュガーを五本持ってきた。

章吾はそれを次々とコーヒーに入れていく。

「やっぱ、甘いもんとか欲しくなるのか？」

「滅多に出ねえからな」

呟くと、樹は声高に社員たちに言った。

「おい、この間貰ったバウムクーヘンあっただろ。あれ全部持ってる」

「じゃ、じゃよ」

「いいから食えよ」

「いらねえって」

章吾の声が聞こえたのか、また男性社員がこちらを見た。女性社員は、関わりたくないで

も言うようにパソコンと向き合う。さほど広くはないオフィスは、章吾の低くしずかな声の影響か、緊張感に包まれた。

「ある意味変わってないな」

樹は笑う。

久しぶりに会ったというのに、さして話すことはなかった。新宿に行くついでに手紙の札を

と違って連絡したが、気まずい空気だけが流れた。

部屋にはパソコンのキーボードを打つ音と、派手なつけ爪の女性社員がスマホの画面を操作

する音だけが響く。樹は所在なげに壁時計に視線をやり、また章吾を見た。

「いやよ、章吾は覚えてないかもしれないけど、おれの知り合いでユウジって奴がいてよ。そ

いつも懲役喰らって川越に行ってたんだよ。そうしたら出てきたときにな、多分、おまえが

一時遊んでた山井って奴が、川越にいたぞ”って言うからさ。びっくりしちまって」

「ああ」

「おれも地元離れてた時期で知らなかったからよ……驚いちまって。それで調べたら……事件

のことがわかって。で、手紙書いたんだよ」

「そうか。ありがとうな」

沈黙が流れる。

「仕事はどうすんだ？」

「もう決まってるんだ」

「どこに」

「ねじ工場」

「ねじ工場って、おまえ……地味だな」

章吾はカップに残ったコーヒーを飲む。

「いやな、手紙送った理由でもあんだけどよ、章吾さえよけりやうちの会社で働かねえかな、
と思っよ」

章吾は横目で、デスクで働く面々を見た。

「給料、最低五十万は出すからよ」

「なんの仕事だよ」

「うちも人材派遣やってるとき、結構面倒なトラブルもあるんだよ。そんなときにな、おめえみ
たいに迫力ある奴がいてくれると助かるんだよ。背もでけえしよ」

樹は微笑む。

「人材派遣って——なんの派遣だ」

樹は笑みを浮かべたまま、なにも答えなかった。

「ま、色々」

ようやく口にした樹の目を、章吾はしずかに見つめる。十二年間、塀のなかにもすぐには
わかった。このオフィスで働く男女の雰囲気は、堅気のそれではなかった。おそらく最近流行
っているという、特殊詐欺の犯罪グループだろう。

「弱い奴……爺さん婆さんを騙した金で食う飯はうまいか？」

章吾は呟くように言った。

樹は黙って、章吾の目を見ていた。

と、デスクのいちばん奥に座っていた二十代半ばくらいの男が席を立った。先ほどから、誰
よりも章吾を見つめていた男だった。男は章吾の横に立つと、黙って見下ろしながら睨む。黒
いトレーナーの袖を捲り上げた両腕には、タトゥーが刻まれている。

章吾はゆつくりと、男の目を見る。

男が、章吾の前のテーブルになにかを置いた。

透明な袋で小分けされた、バウムクーヘンだった。

「食えよ」

男は言いながら、手に持っていたバウムクーヘンをまた置く。

「社長が言っただから、受け取れ」

章吾はしずかに相手の目を見つめる。

「……食えって言っただよ」

男は右手の拳を握った。

「だいたいなんだよ、悪ぶってる奴がこの髪型」って。ああ？」

章吾はゆつくりと椅子から立ち上がり、樹に言った。

「帰るわ」

すると男は道を塞ぐように、章吾の目の前に立つ。一八五センチある章吾より、男はおおきかった。

「……どけよ。消えろ」

章吾がしずかに言う。

と、男が一重瞼の奥の目に入れたのがわかった。右手の拳をつよく握っている。

すると樹が、苦笑いを浮かべながら男に言った。

「やめとけ、三好。こいつはな、おれがガキの頃、街にいたときのツレのひとりだ。おまえなんか敵う相手じゃねえよ」

「社長」

三好が「やらせてくれ」と言わんばかりの目で、樹に言った。

「こいつは、男相手には容赦ねえぞ。しかも変わってんだよ。群れない性格だし、はっきり言や、きちがいだ」

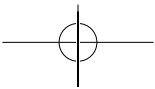
章吾は黙って床を見つめた。

「こいつ、人殺ってんだよ」

三好はそれを聞いて、息を呑む。

「勤めてた美容院に来た客によ、金貸してくれて頼んで断られて、包丁で滅多刺しだ。怖いだろ？」

男は握っていた拳を解き、道を開けた。



樹はもう笑顔さえ見せず、鼻で笑いながら章吾を見る。デスクの引き出しを開けると、帯が巻かれた一万円の札束を机上に投げた。百万はある、万札の束。

章吾は紙の束を見つめた。

「章吾。おれたちもよ、おまえが塀のなかにいる間、色々ありながらも楽しくやってんのよ。金ねえだろ？ 出所祝いだ。これ持って、二度とおれたちの前に顔出さねえでくれ」

樹は席を立ち札束を掴むと、章吾のコートのポケットに入れようとした。章吾はその手を掴み、金を机上に落とす。

「しらねえよ」

樹は呆れたように笑い、代わりにバウムクーヘンを取った。

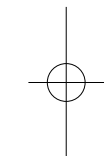
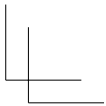
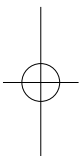
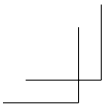
それを、章吾のポケットに突っ込む。

「もう、二度と来ないでくれ。な？」

*

新宿の街を歩く。歌舞伎町もずいぶんと変わっていた。と、あることに気がついた。広い通りだというのに、自分は道の端をずっと歩いている。刑務所時代の癖だった。

灰色の刑務所の廊下を歩くときは受刑者同士、縦に並び行進する。外部からの人間が前から歩いてくれば、受刑者たちは端に寄って立ち止まり、壁側をむいて目を合わせないようにする。彼らが自分たちの背後を通り過ぎてから、また人形のように躰を元に戻して歩を進めるのだ。



——もう、真ん中を歩いてもいいのか。
試しに中央を歩いてみる。

が、なにも気持ちよくなかった。

「くれぐれも繁華街には近づくな。なにに巻き込まれるかわからん。普段は物静かなおまえだが、実は血の気が多いことはわかっている。決して繁華街には近づかない。わかったな？」

相川刑務官の言葉が、章吾の脳内を巡った。

相川がそう言ったのには、訳があるのだろう。章吾が入所二年目に、新入りの男をひとりの受刑者が執拗にいじめていた。刑務所にいじめはつきものだ。章吾はいじめを繰り返す男を殴り、懲罰を喰らった。おそらくそのことを、相川は気にしていたのだ。

でも相川の心配は無用な気がした。いるのは地べたに座る少年や少女くらいで、とても自分をなにかに巻き込むような類の人間はいなかった。

でももう、繁華街へ来るのはやめよう。どちらにせよ、居場所はない。

章吾は明日挨拶へ行く「浅井鉄工所」のある荻窪駅へむかった。

荻窪駅に着き、駅ビルで下着と衣類、必要な分の日用品を何点か買う。明日工場へ着ていくスーツは、ワイシャツとネクタイと共に相川刑務官が用意してくれていた。

レジに並ぶとほとんどの客がクレジットカードか電子マネーというもので支払いを済ませていたが、章吾はその都度財布を開け、現金で払った。

十二年間、塀のなかで刑務作業というものを行い、だいたい月に四千元ほどの報奨金というものが出る。年間にすれば、五万円弱だ。そこから刑務所で必要な物を買うので、出費もある。章吾は出所の際にまとめて貰えた二十万円ほどの報奨金を、大切に財布に入れていた。これしか頼るすべはない。

とはいえ腹は減ったので、適当な拉麵屋^{ラーメン}を見つけて入った。うまかった。だが——異常に熱く感じた。でもそれは店が悪いのではなく、長年の刑務所暮らしで、熱々の汁ものなど出されなかったからだ。店を出て、今晚の寝床の漫画喫茶に当たりをつけて、することもないのでひたすらに歩いた。

すると延々と川がつづく善福寺川緑地という場所に辿り着き、その中にある公園でしばらく時間を潰そうとベンチに座った。

目の前にはどこかの高校があり、土のグラウンドが見える。真っ白なユニフォームに身を包んだ野球部の少年たちが練習しているのが見えた。

トスバッティングをしている様子を見ると、下手ではない。

——懐かしいな。

章吾は、野球の有望選手だった。小学生の頃から入っていたリトルリーグでは都の代表選手に選ばれ、中学でもその活躍はつづいた。いくつかの強豪校から野球の推薦の話もあったが、中学二年のときに児童養護施設に入ることになり、結局その話もなくなった。

……あのまま野球をつづけていたら、もうすこしまともな道を歩いていたのかもしれない。

と、少年が打ち損なつたボールがフェンスを越えて、転がって来た。
「すみません！」
フェンス際に走って来た少年が白い帽子を取り、頭を下げている。
「いくぞ」

章吾は久しぶりにボールを握り、フェンスのむこうに投げた。少年はボールをクラブに収め、去っていった。

あの少年は、自分が人殺しだと気づいていないのだな。そう思った。
当たり前だ。胸に「人殺しの前科者です」と紙が貼られているわけでもない。おれはもう、自由になつたのだ。

だが、その自由こそ、厄介だつた。なにもすることがない。

——自分はこちらから、どう生きていくのだろう。

コートポケットに手を入れると、先ほどのバウムクーヘンが出てきた。一瞬——樹が投げた札束を思い出した。あの瞬間、恥ずかしいが受け取るうかと逡巡した。

うつそうとした木々の隙間から鳥の声が聞こえる。先に見える電線には、カラスたちが陳列された商品のように並んでいる。なんだかそれが音符みたいに見えて、章吾はひとりで笑つた。

「カラスはバウムクーヘン、食うかね」

章吾は独り言ち、封を開け、地面に投げしてみる。

一羽のカラスが反応し、翼を広げようとした。

「お」

と、その時だつた。

電線に止まっているカラスの群れが一斉に別の方向へ飛んでいった。見ると何かから逃げている。必死に翼を広げて飛び立つカラスの後方に、緑色の鳥たちがいた。インコの群れだつた。強者であつたはずのカラスが、インコの群れに追い払われている。

時代の変化を感じた。

冷やかな視線を浴びながら樹の会社を出て、新宿の街にさえ居場所を見つけられなかった自分とあのカラスが、似ている気がした。

「荻窪駅南口行、発車します」

運転手の微かな声が耳に届く。

公園を出るといまにも雷にでもなりそうな雨が降ってきて、バスに飛び乗つた。赤色をした関東バスの車内は思っていたほど混んではおらず、老人も見当たらず、章吾は空いている左後部の座席にひとり、座る。

ぼんやりと、雨に濡れる車窓のむこうを眺めた。

バスは幼い頃から好きだつた。のんびりとした空間のなかで、車窓のむこうの景色が後方へゆつくりと流れていくのが、好きだつた。東京の電車は基本、座ると軀を横にして進んでいく。なにかそれが、未来へ横に進んでいくよう。章吾は好きではなかった。それに比べてバスは、

ゆっくりと前へと進む。まるで未来を確かめるように足を前へと進め、過去を後ろへと流してくれるのが好きだった。

十二年ぶりの外の世界は、やはり変わっていた。十八歳から逮捕されるまでの間、美容師の見習いとして働いていたが、あの頃は男性も女性もみなこぞって髪の毛を茶色く染めていた。でも通りを歩く若者を見ると、黒髪もいれば、ブラウン、オレンジ、ピンク——なかには毛先だけを派手に染めている若者もいる。刑務所のテレビで知った「多様性」という言葉を、意味もわからずに思い浮かべた。

あの頃なんて、とうの昔にない。すこし気分が滅入っている自分に気がつく。

——ぐじぐじしてたって、仕方ねえ。たのしいことでも考えろ。

気がつくともバスは、細い道へと入っていった。

片道一車線の道路は異様に狭く、左にある歩道は、手を伸ばせば届きそうな距離だ。

バスはゆっくりと、ゆっくりとその身を前に運んでいく。

前方のおおきな窓のむこうで、信号が黄色から赤に変わるのが見えた。

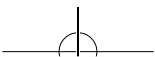
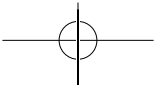
章吾は力なく、窓の外を眺めた。

ちいさな弁当屋が真横にあった。

——こんな細い通りで、営業しているのか。

雨に濡れぬよう傘に隠れながら、スーツを着た何人かの男がちいさな店先に並んでいる。

雨を嫌がる様子もないその客たちの顔からは、なぜか笑みがこぼれていた。



その原因は、彼らとショーケースを挟み、立っている女性にあるようだった。

髪の毛を後ろで一つに束ね、三角巾を巻いたひとりの女性が、素早く注文を取りながら時折

客を見ては話しかけ、相手が笑っている。

雨のむこうに見える彼女が、隠れているはずの太陽のように明るく、美しく思えた。

すこし切れ長な目、薄い唇の彼女が笑っている。

その時、手を伸ばせば届きそうなほど近いショーケースのむこうの彼女が、章吾を見た。

——目と目が、合った。

章吾は目が合ってしまったことに動揺しながら、目を逸らすこともできなかった。

すると彼女は、ちいさくびよこんと頭を下げ、章吾にむかって笑った。

「……え」

再び彼女は次の客と談笑しながら、慣れた手つきで注文された弁当を取っていく。

赤信号が青に変わり、バスは発車する。

ちいさく過去になって消えていく彼女の姿を、章吾はなぜか、見ていた。

